

高齢社会を共に生きる教会

— 高齢者問題検討委員会のまとめと提案 —

1999年3月

発行 日本聖公会東京教区

はじめに

電車や街で年輩の方を見かける機会がふえました。社会の“高齢化”を実感する場面です。教会でも、年輩の方が増えたと感じる事が多くなりました。

高齢の信徒が増え、さらに増え続けている今日、これまで以上に、高齢者の要望に耳をかたむけ、組織的に対応していく必要があります。

また、高齢化しつつある社会の要請に、教会は宣教の一環として応えていかなければなりません。教会が、地域の高齢者の必要に、どれだけ応えられるかが問われています。



高齢化のなかで聖書から何を聴くか

わたしはあなたたちの老いる日まで、
白髪になるまで、背負っていこう。
わたしはあなたたちを造った。
わたしが担い、背負い、救い出す。

〔イザヤ書第46章4節〕

高齢者が差別されたり、疎外されたり、
役立たないものとされてはならないのです。
教会はこのメッセージを社会に向けて発信し続けなければなりません。
。

だから、わたしたちは落胆しません。
たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、
わたしたちの「内なる人」は日々新たにされています。

〔コリントの信徒への手紙二第4章16節〕

人生の意味は、年齢とともに深まる
もの。高齢期は、人生の意味を問い、
ひとりひとりの人生を完成させる時期です。この人生を完成させる営
みを霊的に支えることは、牧師の重要なつとめです。

だれかが弱っているなら、わたしは
弱らないでいられるでしょうか。
だれかがつまづいたら、わたしが
心を燃やさないでいられるでしょうか。

〔コリントの信徒への手紙二第11章29節〕

現代の社会は高齢者に対して優しくはありません。私たちのそばに弱っている人がいれば、黙って通りすぎることはできません。その人と関係をもち、与えることによって私たちは生かされ、真の喜びを知ることができます。



世を去るときが近づきました。わたしは、
戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、
信仰を守り抜きました。

〔テモテへの手紙二第4章6～7節〕

高齢者に対する福音伝道が、宣教の最前線になるべき時代がきています。そして、高齢者自身こそ、その役割をになうのにふさわしいのです。教会は、高齢者が新しい経験をし、この世を変えるために、参加するところでもあります。

信徒の高齢化

東京教区の信徒の年齢構成も、高齢化しつつあります。
信徒の年齢構成の変化を調べ、このままいくと将来どうなるかを予測してみました。



1994年～1998年の4年間に、信徒の数は、全体として、わずかに減少していました。

性・年齢別にみると、増加したのは60歳以上のみで、20歳未満は減少していました。

このまま推移すると、若い人の割合は減り続け、高齢者の割合がますます大きくなると予想されます。

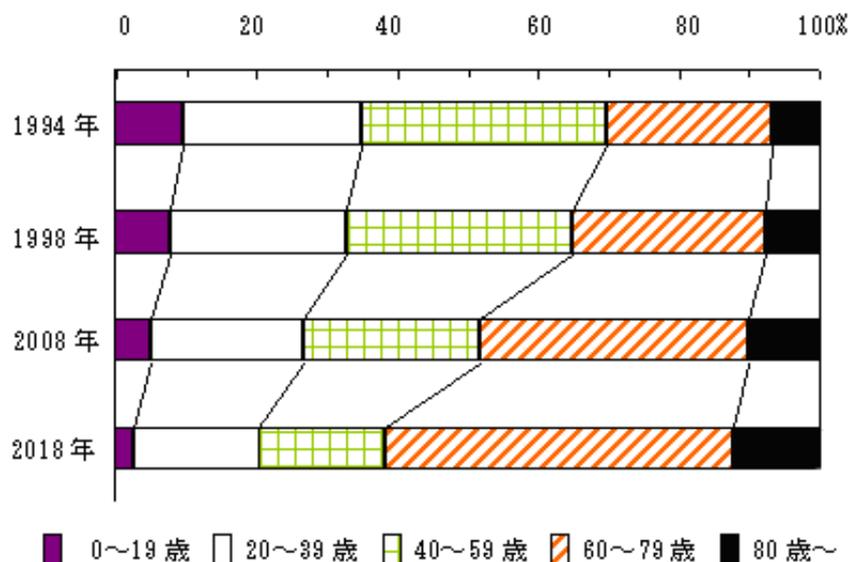
とくに、60～79歳の人が増加が大きく、2018年には、この年齢層が信徒全体の半数を占めることとなります。

また、80歳以上の人の割合も現在の倍となります。

現在もっとも多い40～59歳は信徒全体の2割未満になり、20歳未満の人はわずか3%となります。

このような変化は、若い信徒の増加があまりなく、現在の信徒が徐々に歳をとっていくことから起こるものです。

信徒の年齢構成（実態と将来推計）



かつて“青年の教会”であった東京教区が、現在では“中年の教会”になり、このまま
 でいくと、近い将来には“高齢者の教会”になると予想できます。

高齢者の要望に耳を傾け、組織的に対応していくことが求められています。たとえ
 ば礼拝出席のための交通手段の確保や、建物のバリアフリー化などがあります。ま
 た、礼拝中の朗読のスピードや音響、照明の問題がありますし、食事の味付けや量
 などにも工夫が必要になるでしょう。そして、家庭訪問や家庭集会在、今よりもず
 っと大切になるでしょう。

高齢者は宣教の担い手

もしあなたが高齢者であるなら、豊かで自由な時間をどのように使いますか。

高齢期の豊かで自由な時間は、私たちひとりひとりに、人生の完成のために神さまから与えられた賜物です。身体は弱るかもしれませんが、魂の成長は、心構えと準備により最後まで続けることができます。

人生の完成は、周囲の人たちと「共に生きる」ことによって達成されます。

私たちは、東京という大都市に遣わされています。この社会は、100人のうち99人がクリスチャンでない社会、また高齢者の自殺や虐待にみられるように、高齢者にとって苦痛と悩みの多い社会です。私たちの人生の完成は、これらクリスチャンでない人々、苦しみの中にある人々と無関係には成し遂げられません。



私たちは、与えることによって生かされ、真に喜ぶことができます。

私たちは、歳をとるにしたがって、与えられることを期待し、また高齢者には与えなければ、と思っていないでしょうか。

神さまが、私たちに多くの賜物を下さっているのは、それを自分のためではなく、隣人のために使うためなのです。



高齢者は、福音宣教の重要な担い手です。

福音宣教は、共に人生の意味を考えるとところから始まります。そのきっかけを与え、完成させて下さるのは神さまで。ことさらに声を張り上げる必要はありません。愛するということは、その人のありのままを受入れること、受け入れるとは、耳をかたむけるということです。

あなたの教会は、高齢者の働きのための支援プログラムをもっていますか。

教会は、私たちの母船です。慰め、癒し、元気を与え、そしてまた送り出します。

地域の高齢者のために

教会は、遣わされた場である地域の社会と、離れていることができません。

私たちの地域のための働きが、地域の人々に受け入れられ根づくためには、「地域の人々と共に生きる」ことが大切です。そのためには、これまでの教会の姿勢をかえることが必要になるかもしれません。

あなたの教会の特色は何でしょうか。

1. あなたの教会は、どのような地域にありますか？

都心商業地、住宅地、あるいは近郊ターミナルでしょうか。

2. 教会の資源は、有効に使われていますか？

教会は日曜日だけの存在ではありません。
教会がもつ人（信徒）、もの（土地、建物）、かね（献金）など、
すべての資源は、神さまからの賜物です。週日の教会は有効に使われている
でしょうか。

信徒の年齢構成は？

信徒が教会に来るのに要する時間は？



社会も変わり、地域も変わっています。
教会の対応も変わっていかなければなりません。
多くの地域で高齢者の問題が緊急性を帯びてきています。私たちは、この問題に深い
関心と理解をもたなければなりません。

かつて盛況だった子どもたちのための日曜学校、ボーイスカウト、プレイグループ（乳幼児と母親の集い）、保育園、幼稚園は、少子化など社会環境の変化にともない多くの教会で存続が危ぶまれています。他方、地域の高齢者への対応が、新しい大きな課題になっています。

教会の特色にあった多種多様なプログラムが考えられます。たとえば

1. 健康な高齢者のためのプログラム

生涯学習の一環をになう読書会、趣味の会、ボランティア活動など



2. 介護を要する高齢者のためのプログラム

行政機関やボランティア団体との連携、ボランティア活動、作業所やデイサービスなど



地域社会の必要に応じて

教会は、それぞれの時代の、社会の必要に応じて、「いと小さきもの」に仕える働きをしてきました。たとえば、

明治時代、東京の下町で、病気で苦しむ人々のための活動が、宣教医師たちによって始められました。今日の聖路加国際病院です。



見捨てられ、かえりみられることのなかった高齢の女性たちに、宣教師が衣食住を提供した事業は、日本で最初の高齢者福祉施設になりました。聖ヒルダ養老院です。

濃尾大地震の後、行き場を失った孤児への救済を出発点として、日本で最初の知的障害児のための施設が作られました。今日の滝乃川学園です。

第二次世界大戦の直後には、世間の冷たい目にさらされていた混血孤児のために、エリザベス・サンダース・ホームが開設されました。

最近では、難病と闘う子どもと家族に宿泊施設を提供する「ぶどうのいえ」の働きがあります。

そして今、東京教区は、江東区深川で、新しい働きをはじめようとしています。

深川の地に遣わされた聖救主教会は、地域の人々の必要に応えようとつとめてきた教会です。

第二次世界大戦以前には、地域の子どもたちのために幼稚園を運営し、戦後は木場に働く青少年のための「深川勤労青少年センター」を開設しました。

木場が移転し、この地域にベビーブームが到来したときには、「まこと保育園」と「キッドスクール」の運営を始めました。

そして、高齢化が進むなかで、高齢者総合福祉施設を開設しようとしています。

特別養護老人ホーム「深川愛の園」は1999年5月に開所します。

「深川愛の園」には「まこと保育園」と地域交流スペースが併設されます。聖救主教会とともに、さまざまな世代の出会いと交わりの場となっていくことでしょう。



教会につながる一員として、私たちには何ができるでしょうか。

ボランティア

私たちが、つらい事に出会ったとき、乗り越えられるのはなぜでしょうか。
それは、誰かの励ましがあるからです。

私たちは一人ぼっちではありません。
私たちは、「共に生きる」隣人に、知らず知らずのうちに助けられ、そして、隣人の役に立ちながら暮らしています。

「共に生きる」ということ

それは、隣人のため、その人の「よりよき人生」の実現のために仕えることです。

ボランティア活動

それは、隣人と共に生き、共に成長していくことを意図した活動です。



21世紀には人口の高齢化がさらに進み、教会の中でも外でも、高齢者が多くなります。

その多くは元気な高齢者ですが、心身の弱った高齢者も増えていきます。



元気な高齢者は、家庭で、地域で、そして教会で、多くの人と交わり、親交を深めていくことでしょう。このとき、地域の一員として、ボランティア活動に参加することができれば、他者と共に生き、共に学び、共に喜び、若者をはぐくむ豊かな時をすごせるでしょう。

心身の弱った高齢者は、家庭の、地域の、そして教会の一員として、ボランティアの人と共に生き、共に喜び、共に学ぶことができるでしょう。

老いも若きも共に生き、手を取り合っていきましょう。

高齢者と共に

今日、教会に行って、誰と話をしましたか？

教会で、いつも同じ人とばかりお話ししていませんか？

同じ年頃の人とばかり話していませんか？

教会に行くと、いろいろな人に会うことができます。

核家族化が進むこの社会にあって、さまざまな世代がつどう教会は、理想の“社会”でもあります。

教会の行事に、みんなで、協力して、参加していますか？

教会に行きたくても、行くことのできない高齢者もいます。

この人たちのために何をしたらよいでしょうか？

教会への送迎や訪問など、できることは多いはずです。



高齢者は人生と信仰の先輩です。

長い人生を通して、神さまが何を教えて下さったのか聞いてみましょう。

高齢者に役割をもってもらいましょう。

教会での案内係、アコライト、オルター・ギルド、信徒奉事者、機関誌の編集、聖書研究会、食事やお茶の当番など。

共にレクリエーションで楽しみましょう。

自然の中でのハイキングや運動会、イベント、音楽会、碁や将棋、トランプの会など。

高齢者のペースに合わせ、高齢者の知恵や経験に聴きながら、共に感謝の気持ちを忘れずに。



あとがき

高齢者問題検討委員会は、1997年3月の教区会の決議により「高齢者問題を考える」ために集められ、2年間にわたって活動を続けてきました。

与えられた課題は、「高齢化」する社会の中で教会はどうあればよいのか、そして特に高齢者総合福祉施設「深川愛の園」をどう支えればよいのかを考えることでした。

この委員会の活動を通して、私たち委員は造り変えられたことを実感しています。はじめは「高齢者」という集団に対する思いであったものが、「高齢になるまで命の恵に与っている人」の、いのちの重みに引きつけられ、その中に主の愛を見出し、希望を持つものへと変えられました。この小冊子は、そのような私たちの証しです。

この喜びが、これを読んで下さる方々の中にも起こされ、そして広がるようにと祈ります。この冊子がそれぞれの教会で用いられ、さらに話し合いを重ねて、豊かな「行い」として実現されますよう期待いたします。

私たち委員を集め、出会わせ、情熱を失うことのないように共にいて下さった主に感謝しつつ、これを2年間の活動の報告といたします。

1999年3月

日本聖公会 東京教区
高齢者問題検討委員会

この冊子の購入にあたっては.....
東京教区事務所 宣教主事 岡野峻
(電話03-5228-3171) までどうぞ
